第 13 回　21 世紀大腸菌研究会　報告記

京都大学ウイルス研究所　D3　秋山光市郎

13 回目の大腸菌研究会が 6 月 2 日と 3 日の 2 日間にわたって開催された。今年は九州大学の片山勉先生が幹事ということで、約 60 名の大腸菌研究者が会場である熊本県のホテルグリーンピア南阿蘇に集結した。私は研究会があまりにも楽しみだったので、バスが 12 時 20 分熊本空港発であるにもかかわらず、9 時前には空港に到着していた(注 1)。ホテルまでの移動は今年 4 月 14 日及び 4 月 16 日に起こった熊本地震とその後の余震の影響で迂回ルートを通った。ホテルの立地は標高が高く、好天にも恵まれて景色は最高だった。見渡す限りの大自然の緑と時折煙を吐く阿蘇山を見ていると心が洗われるようであった。

研究会は、片山先生からの挨拶の後、地震により亡くなられた方への黙祷から始まった。ホテルまでの道のりでも倒壊していたりビニールシートを被せられたりした家屋を多く目の当たりにしており、1 日も早い復興を祈るばかりである。1 日目は口頭発表セッション2つとポスターセッションが行われた。口頭発表は 11 分＋ディスカッション4分だったが、これが長過ぎず短すぎず絶妙だった様に思う。ポスター発表の時間も十分確保されており、多くの発表を聞くことができた。

夕食時には東京都医学総合研究所の正井久雄先生から乾杯の挨拶があり、「人生はグアニン 4 重鎖」という名言が生まれた。正井先生からは、「自分が見つけたことを大切にすること」「自分の研究を面白いと思うこと」「先生とよくディスカッションすること」という大学院生に向けた 3 つの有り難いご助言も頂いた。私もこれらを心に留めて残りの大学院生活を送りたい。夕食時には 1 人 40 秒程度の自己紹介タイムが設けられた。研究の話を真面目にする方もいれば渾身のジョークを織り交ぜる方もおり、参加者それぞれの個性が見えて興味深かった。夕食後にも総合討論という形で深夜まで熱い議論が繰り広げられた。旧交を温めたり、新たな出会いがあったりと、大変有意義で楽しい時間であった。

ただ私としては、渾身の新作一発芸 2 つがいずれも不評だったことが心残りである(注 2)。また、男湯の露天風呂では多くの男児が集結して大変盛り上がったが、紙面の都合上会話内容は割愛する。

2 日目は 3 つの口頭発表セッションがあり、1 日目同様多岐にわたる最先端の研究成果が発表され、それについての活発な議論が交わされた。最後に国立遺伝学研究所の仁木宏典先生から、NBRP が今年分譲を開始した *in vivo* cloning が可能な株などが紹介された。この株は昔から存在していたものの、長年ラボで眠っていたという。この様にまだまだ各ラボには有用な菌株が眠っている可能性があるので、何か見つかれば是非 NBRP に登録して共有しましょうとのことであった。

全てのセッション終了後には総合討論があり、立教大学の塩見大輔先生と同じく立教大学の末次正幸先生が新世話人に就任することが発表された。同時に、塩見先生と末次先生が早速来年の大腸菌研究会の幹事に任命された。その後は参加者全員で写真を撮影した。私は仁木先生に鬼にされていたようであるが、撮影時は少しでも男前に写る為に必死でカメラに集中していたので気がつかなかった。

最後に、優秀発表賞が表彰された。どの発表も素晴らしく、審査を担当した世話人会の先生方も選考の際は非常に悩んだとのことである。受賞者は以下の通り（敬称略)。優秀口頭発表賞：須藤直樹、塩田拓也。優秀口頭発表賞（修士部門)：小野田千鶴、沢里克宏。優秀ポスター発表賞：石井英治。優秀ポスター発表賞（修士部門)：青山遼、加納巧希、西川華子。

19 題の口頭発表と 34 題のポスター発表はどれも面白く、ディスカッションも

活発に交わされて非常に内容の濃い研究会であったことから、参加者各位の研究が今後益々発展すると確信している。

　末筆ながら、地震が起こり大変な時期に幹事を務められ、研究会を大変素晴らしいものにして下さった片山先生をはじめとする片山研究室の皆様に心からお礼申しあげます。

(注 1) 早く熊本入りして熊本城を見る予定であったが、地震の影響で熊本城はほとんど立ち入り禁止となったので諦めた。航空券は早割で購入したため変更できなかったので、阿蘇周辺の散策に切り替えたが、徒歩で行ける範囲に観光地的なものはなかった。それでも空港のテレビで流れていた熊本放送でくまモンが元気に丘を駆け下りてくるシーンを視聴し、十分に熊本を感じられた。

(注 2) 言い訳ではないが、ラボ内では支持する声もあった。